

会にはそれを正当化すべくコードのほうが変わらねばならないこともある。

これをスマートにやってのけたことで名高いのがプリンス・オブ・ウェールズ(皇太子)時代のウィンザー公。たとえば1933年、ホワイトタイに燕尾服が正式な夜の正装であった時代に、ブラックタイとディナージャケット(タキシードのイギリス式呼称という「カジュアルダウンした」コード破りの装いで現れる。以後、燕尾服が伝統衣裳の殿堂に追いやられ、ディナージャケットこそが標準正装となっているのはご存知のとおり。

新しいところでの注目株は、やはり英国王室だが、ザラ・フィリップス、アン王女の娘で、今年のロイヤル・アスコットで話題をさらった。ロイヤル・エンクロージャー(特別席)に入る女性に求められる服装は、「日中用フォーマルウェア」すなわち両肩が覆われた膝下丈のドレスを着用し、頭頂が隠れる帽子をかぶる、というものであるが、ザラときたらワンショルダーで肩を露出し、太ももまでスリットを入れたタイトなドレスで現れた。しかも帽子は花が一つ額についただけの、頭頂むきだしのデザイン。プロトコルギリギリ破りである。

がしかし、平素あちこちで行われている日中の社交の場で、これしきの露出は今や珍しくもなんともない。むしろプロトコルのほうが時代錯誤的に見える。好意的に解釈すれば、ザラが行ったのは、世の潮流にプロトコルを合わせるための、確信的な突破りだったかもしれない。(三)や(四)における変化を察知し、確信的な突破りによってドレスコードを時流に合わせる契機を作るのもまたノーブレス・オブリージ(高

貴なる者の義務)なのである(たぶん)。いずれにせよ、ザラの試みの成否は、来年以降のプロトコルの変化(あるいは不変化)に現れよう。では、そのプロトコルに小さからぬ影響を与える(三)や(四)であるが、言うまでもなく、このような日常的社交に見られるドレスコードがもつとも頭を悩ませる。

一応、不文律の慣例を知ったとして、そのとりに装えば可なのかといえれば決してそういうわけでもないからだ。慣例に「自分なりのはずし」なるアレンジを加えたり、「等身大」なる小物にこだわったりする「個性」が求められるのである。その結果、はずし方や等身大選びさえもマニュアル化され、はずしや等身大までみんな同じ(すごい言語矛盾)という珍妙な光景が出現するのだが、いや、それはそれで、その社会の掟を熱心にお勉強したという「暗号」が通じたことになるのか?

しかも、基本とあおぐべき「慣例」が流行の波をもろに受けて日々刻々と変わる。昨日のアウトは今日のイン、今日のカジュアルは明日のセミフォーマル(数年前までタブーだったTシャツやジーンズはもはや「はずしセミフォーマル」の必須アイテムと肝に銘じて周囲を見渡し、微細な空気の変化を常に感知し続けていなければならないのである。深い冒険で喝采を浴びるのも、無難な埋没で平穩無事に乗り切るのも、ひとえに本人の知性と度胸したい。

まあ、そんなことはべつにドレスコードの領域に限ったことではなく、およそあらゆる社会的行動においてあてはまるものなのかもしれないが、知れば知るほどドレスコードって、ほんと人間くさいシステムである。

column

ドレスコードは時流を無視できない。

中野香織=文
text: Kaori Nakano

コ

「ド(控)はあくまでガイドライン」とは、ジョニー・デップの怪演ひときわ光った映画「バイレーツ・オブ・カリビアン」のなかのセリフであるが、そういえば、別に法典があるわけじゃなし、破ったって刑に処せられるわけでもない、あくまで仕事や人間関係をスムーズにするものとして全員が了解しているガイドライン(指針)である、という点では、海賊のコードはドレスコードと似ていなくもない。

などと漠然と感じつつ、「誰が何を着ようとする」ということになっている現代においてもそれなりの効力を発揮しているドレスコード(服装規定)というものを調べてみたのだが、いやはや、ドレスコードといってもとても一様には語れない。大雑把ではあるが次のように分類してみた。

〈その一〉 プロトコル(外交儀礼)としてのドレスコード。

個人のマナーやエチケット以前に尊重しなければならない国際作法のルールである。このレベル(宮中晩餐会とか公式レセプションとかで指定される「ホワイトタイ」や「ブラックタイ」とは、外務省が編集する「国際儀礼に関する12章」に書かれるガイドラインに沿ったフォーマルな装いだ、それは主催者側が招待客に求めるコード(礼儀作法)でもある。礼儀作法という意味では、冠婚葬祭における装いもここに含んでよいか。

〈その二〉 規律・秩序を守るための、成文化されたドレスコード。

軍隊・学校・プロスポーツ・企業など、秩序や規律を乱さないために管理する側が強い詳細かつ具体的なコード(規則)。破れば罰則もあり。

〈その三〉

場の雰囲気や一定の基準に保つために、主催者側が指定するドレスコード。クルージング、各種パーティー、レストランにおいて主催者あるいは経営者が指定する「カジュアルシック」「セミフォーマル」「平服」といった抽象的なコード(基準)がこれ。「亀をひとつ身につけてくること」といった指示のように、場の連帯感を強め、楽しむためのコード(お約束)もこの変型版といえよう。また、「昔前の「マハラジャ」の黒服の頭(あるいは下半身?)のなかにあつたような、客を選別・排除するための不明瞭なドレスコードもこの系列に入ろうか。

〈その四〉 暗黙のドレスコード。

誰かが指定するわけでもないのに、成員が自発的に編み上げるとしか思えないコード(控)。およそソサエティのあるところ、この暗黙の掟あり。成文化された服装規定などないオフィスはもちろんのこと、公園デビュー、主婦のランチ、PTAの会合といったささやかな「社会と関わる活動」のなかにおいてさえ、コード(慣例)を大幅に逸脱するナイーブ(世間知らず)ぶりを露呈すると社会的制裁にもあいかねない。また、「独創的な着こなし」が生まれる場所であるはずの真中目黒や裏原宿においても、「ストリート」の正装「なるコード(暗号)」の知識の有無の表現が、「人種」を分かつ基準になっている。

そんな各種ドレスコードの具体的内容は流行を横目で見らみつつ刻々と変わる。

〈二〉のプロトコルの場合、変化の契機を

作るのは、多くの場合、やんごとなき身分の方である。平民がドレスコード破りをして失笑を買っただけであるが、たとえば王室のメンバーがこれを行った場合、次の機

code!